

『末黒野』 令和三年十二月五日発行 第七十二巻第一二号 文芸春秋社発行

末黒野 すぐろの



12月号
(通巻904号)

地の皺

阿夫利嶺の雲や秋意をあふらせて
裏返る葉もなき真昼真葛原
処暑の風書斎に溜まる熱浚ひ
言葉尻の時にうやむやつくつくし
白萩や夕風の棲む法の庭
いつしかに地の皺隠し葛の花
寡黙なる園丁の昼黄のカンナ
月明の墓道に沿ひ白木槿
ありふるる朝の挨拶こぼれ萩
鶏頭へ着火の夕日高嶺より
初もみぢ水場の杓の新しく
一掬の湧水口に実紫

森清堯

処暑の水

曇る日の名残りの一花紅蓮
祖師堂や一山占むる残る蟬
誰も居らぬ夕影の丘涼新た
処暑の水もて磨る墨の匂ひかな
秋蟬や日照雨の奔る滑り台
雁来紅日照雨の過ぐる明るさに
十字路の信号青や紅芙蓉
荒庭の虫鬼灯や夕日影
濡れ色の真緒の芒薄明り
初鴨の四五羽に広し林泉の池
坂の上の四つ辻の寺白芙蓉
白壁の紺屋の軒や秋簾

岡野里子

雁来月

黒滝志麻子

(顧問)

あらかたは読めぬ碑雁来月
 住みなれてこの道知らず葛の花
 絹雲の青空に散り雁来月
 秋暑し名水と言ふ水買うて
 名園の庭苔厚し鬼やんま
 溜池の静もりみたり蘇枋の実
 ひと振りに奮ふたてがみ天高し
 窯焚きの火をよむ人や星月夜

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



秋の声

石黒興平

何かしら語り合ひたくまづビール
 疫病禍の街へやさしく二重虹
 故郷へ長き電話や水見舞
 客送る美容師の手の渋団扇
 鶉と鷺の営巢林や竹生島
 船体の白さを極め大西日
 草じらみつけて釣座の定まれり
 竹林の百幹そよぎ秋の声
 よろづ屋てふ生家の屋号茄子の馬
 耿耿と海の滾れり秋落暉

霧襖

菅野日出子

精一杯生きて見やうか天高し
 秋出水テレビに映る友の町
 散歩にもマスクはなせぬ秋暑かな
 秋暑しあへぎて登る百余段
 あかときの寺領をつつみ霧襖
 子に語る遠き戦時や夜長の灯
 センサーで点く外灯や秋の雨
 日の萎えてよりの散歩や虫しぐれ
 久々の雨よぶ雲や涼新た
 灯を消して浴ぶる月光長湯して
 子等つどふ後の彼岸や古写真

白陀師忌

田中臥石

鯖置いてゆくやむかしの元社員
初恋の想ひ遠くに曼珠沙華
稲穂径蝗跳び付く日の匂ひ
老いたりと思ふ遅るる紅葉狩
けふ長子医通ひの日や秋桜
娘来て明日は私と秋彼岸
かまつかの炎ゆ初めての駝鳥肉
明日死すと思ふ秋澄む空仰ぐ
家族葬決め安寧や緋のカンナ
秋憂ふはたと過ぎけり白陀師忌

秋天

森清信子

立ち枯れの木々を収めて水澄めり
秋空へ大きく窓を開きけり
山荘やつと紛れなき流れ星
未来へとつなぐ湧水秋気満つ
秋天へ滑車軋ませ白帆上ぐ
雲厚くとよもす鴉声芒の穂
かなかなのか細き夕べ絹の雨
山稜のくつきり映えて初紅葉
晴天の久方ぶりや稲の秋
父母を呼べど還らず鱒雲

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



誕辰

岡田史女

見舞ふこと叶はぬ日々や雁渡し
木屋や黒き塀なす門構へ
誕辰の朝より激し稲光
九天や野分過ぎたる空の青
銀漢や詩のかけらの星の砂
師の忌日重なる月や虫時雨
月出でて抽んづる禾皎々と

秋惜しむ

太田良一

秋の灯の壁に煤くる魚拓かな
波音を膝に抱く浜秋惜しむ
星飛んで膨らむ夢や露天風呂
灯台は島の断崖鳥渡る
突堤に一番乗りや鯨日和
背を伸ばす敬老の日や老神父
山宿や取つて置きてふましら酒

放物線

小田嶋野笛

籐椅子に八十路の髪を捕られけり
千の挽歌万の挽歌よ蟬時雨
残暑打つホースの水の放物線
いささかの秋気耳より鼻口より
盆用意買物かるき物ばかり
送り火や心許りをあかあかと
銀漢の浅瀬に浸る深眠り

竹の春

加藤静江

乾ききる池の木橋や秋高し
堰音の高まる寺領竹の春
抛げ入れの大き束ねや秋の草
草茂る澱みの深き心字池
初秋や堰音ひびく無人寺
ほどほどの暮し諾ひ涼新た
出揃へる穂の風生れ芒原

律の風

高木邦雄

祇王寺の竹林さやぎ律の風
渾渾と流るる疎水秋の声
富士全容映ゆる湖水澄めり
白桔梗濁世の風を受け流す
夕照の神南備山や法師蟬
身に入むやまた一つ減る古書の店
高階に仄と香るや金木屋

雁渡し

長尾タイ

雁渡し警策響く今朝の堂
草の穂の池塘の余白雲流る
源流の小さき産声初紅葉
かなかなの途切れしままの静寂かな
木洩れ日の椅子にまどろみ小鳥来る
孫子等の視線を集め西瓜割る
苦瓜や闇にからまる蔓の先

秋の風

今村千年

庭乾ぶ秋海棠の際立ちて
バス停の櫺の蔭や秋の風
長き夜や五輪のビデオいつまでも
潮風のベンチにふたり波止の秋
晩鐘と色なき風の窓辺かな
灯火親し句集薫風読み返し
未黒野創刊九〇〇号記念
鯛干す大海原の色を干す

空 蟬

大川暉美

夏草の伸びて天下や捨畑
朝採りや紫紺の茄子に指濡らす
空蟬の風のふれゆく浄土かな
罅割れの八方の田や喜雨来る
篋の葉の騒ぎそむ秋隣
蝸のはじめての声夕間暮
秋の蝶沓脱石に影落とす



青炎集 森清 堯選



横浜 六崎正善

吹き上ぐる富士の旗雲初嵐
七夕や娘残せる文机
交はりて離れゆく道秋の蟬
産地の名しるす青果や秋高し
うすうすと雲を染めたる良夜かな
海羸廻し親は知らずの秘密基地

横浜 東小蘭美千代

薄暗き裏庭仄と秋めうが
枝折戸や日暮れに泛くる白木槿
彼岸花蕊に野の風とどまらせ
秋桜手向け睨の道祖神
弦月の雲引き連れて池の面
月今宵竹馬の友よ今何処

横浜 小沼えみ子

干し物の秋の匂ひをたたみけり
ジャズ祭の老若男女秋扇
雲が雲おして広がる天高し
秋涼し笑める男の子の名はアトム
裏道の黄花コスモス風やさし
服整理の捨つるは惜しや冬隣

横浜 梅田武

五輪の灯消えて惨禍の秋憂ふ
朝顔や宿場名残の黒格子
ひぐらしの遠音夕餉は有り合せ
箸止めて妻と黙禱広島忌
迎へるも送るも雨や魂まつり
少年の弾む口元栗の飯

大綱白里 岡井マスミ

盆の月駆けてばかりの日を重ね
秋日傘漢日陰を持ち歩く
予報士の如意棒自在けふの月
落栗や屋敷伝ひの近道に
消えかかる指紋に刺せり栗の毬
だあれにも言うてないこと流れ星

横浜 岩上行雄

新涼や壁に墨絵の達磨の眼
夕曇り紅を深むる酔芙蓉
秋風や東屋にはや憩ふ人
竜胆や漢字書くより仮名がよき
鯖雲や飛行機雲のつらぬきて
工事場の朝の訓示の厄日かな

宮城 門間としゑ

表彰式日焼けにのする薄化粧
二重まぶたの千手観音秋気澄む
村祭清水一家に飛ぶ祝儀
閉店の張り紙ちぎれ芋嵐
ほこほこと煮あがる南瓜ざらめの香
菓売りの越中なまり雁渡る

横浜 池乗恵美子

夜上がりの木々のそよぎや涼新た
変はりゆく雲の速さや秋の声
天の川夢と終はりし夢いくつ
稲妻やみなどみらいを斜交ひに
衣被指の細きは母に似て
喜寿傘寿の太極拳や菊日和

横浜 宮元陽子

湖の澄みしを交げて颱風裡
梵鐘の撞木磨り減り風の色
秋晴や手つなぎ回る一輪車
秋の昼バスに多くの年配者
烈日の一日の終り蚯蚓鳴く
徒波を立つる憂き世やうそ寒き

横浜 前原マチ

長雨の去るや何時しか虫の夜に
夕かなかな園を見廻る警備員
電波塔の影の溶け入り秋夕焼
秋めくや怠け癖なる吾に喝
山鳩や望郷つる秋の暮
深みゆく季節や虫の声しきり

耕 土 集

岡野 里子 選

朝虹やビルに半分かくされて
フラメンコ疫病の夏を踏みたたき
噛み合はぬ義歯にいらいら秋の蟬
秋桜ピアノ一途の子は六十路
競ふやう壁を伝はり葛蔓

横浜 平野 秀子

梨三個買ひて一日一個かな
指先は計量スプーン新大豆
落花生茹でてほんわか畑の香
コスモスの風の振れは風が解き
父在れば焼酎となり衣被

横浜 小池 桃代

ままごとの姉妹や庭の女郎花
堰越ゆる水は萌黄や月見船
赤とんぼ六肢固めて棒の先
香の散りて目立たぬ一樹金木屋
かりがねに帰る沼あり夕の道

印西 大坂 正

若き日の写真捨てかね秋の風
明かり消しひとり聞く夜や虫の声
残る巢に無事を祈るや秋燕
実る田を見守る案山子とりどりに
紅葉の朱の命うつすや草木染

横浜 久島しんの

故里の倦くる三日目夏期休暇
端居して妻の小言に空返事
茗荷の子黄花もろとも摘みにけり
手に残る痛みの記憶夏あざみ
大夕焼借景にして塔立てり

横浜 松川 昌義

新涼や憂ひ忘れて深呼吸
へうたん南瓜小店の棚に溢れをり
茸飯の焦げたるあたり旨かりき
風船葛雨の重さを受け止めて
コスモスの丘を見渡す車窓かな

横浜 津野 桂子

井戸端会議弾む道端今朝の秋
秋空やロープで降りる消防士
色々と食べ比ぶれどテラウエア
インクにて使ひたき紺秋茄子
二本買ふ初物秋刀魚小振りなり

川崎 木村 純子

曼珠沙華湖底の村はダム支へ
厨暮れてちちろと始む飯支度
手のひらへ逃す欠伸や秋うらら
鳶の輪を乱す鴉や空高し
草の穂や露もろともに壺に活く

横浜 市川 夏子

香り立つ金木屋や風少し
秋夕焼染まるベンチの老夫婦
長き夜やクイズ好きなる夫のみて
試験待つ孫励ますや栗の菓子
通院の帰りや小さき紅葉狩

横浜 毛利 直子

夏草の階隠す廃墟かな
新涼や焙じ茶香る朝厨
風見鳥飛び立つ構へ夜半の月
尾を引きて流るる雲や秋澄めり
手強きは払へど鳴きぬ名残の蚊

横浜 秋山 文子

かなかなの声に追はるや疾く家路
秋めくや木綿のシャツの肌触り
静寂の中の夕日や桐一葉
湯のほてり冷ます濡れ縁夕月夜
吾亦紅揺れて奏つる野の調べ

横浜 森川 享

秋立つや罅の入りたる瀬戸茶碗
名月や湖面の影のさゆらぎて
五重塔の見えかくれして薄紅葉
案山子殿今年の作を喜びぬ
アルパ弾く民族衣装秋日和

横浜 梅津まり子

桔梗濃し夫の墓まであと少し
瓢箪のくびれの浅き平和かな
世捨人のごとく揺れをり青瓢
いやおう無く老人とされ敬老日
天窓へ一片の雲秋高し

福岡 青柳 節子

ごろた場や駒草灯る縦走路
呼び覚ます青雲の頃法師蟬
肉焼けば晩夏に響く戦鬨機
宅配の慣れぬコースや竹の春
月を詠む支考千代女の俳句かな

横浜 伊藤 鴉

芦ノ湖の俄に翳り秋の雨
多摩川は我が故郷や草の花
溝蕎麦の花粉微塵や虫めがね
石段の萩触れ往けり袈裟の裾
湯上りの窓の夜風や虫時雨

葉山 伊藤 美緒